内と外をつなぐ都市の庭

限られた空間で今育てたい緑

都市の小さな緑化 5つの愉しみ方

広々した庭でなくても、ベランダ、アプローチ、屋上など、小さな空間にだって緑のスペースはつくれるもの。その場の環境を考えつつ愉しみながら緑をつくる5つの方法を紹介する。緑は育つもの。その小さな緑は、いずれ大きな緑となって周囲の自然と溶けあってゆくだろう。さてどんな緑を育てようか。

取材・文　平山友子

オーダーの里山ユニット施工事例。上/東京・広尾に移転し、10月1日にオープンする山種美術館（ハローダイヤル　03-5777-8600　http://www.yamatane-museum.or.jp/）のエントランスを飾る「かずら垣」。1年かけて矢澤ナーセリーで植栽・養生し、施工したばかりでも青々としている。都市建築で植栽を行う際に、工期と施工スペースが確保できなくなるデメリットを解決した。下/養生中に成長していくテイカカズラのツルを、1本ずつ手で金網にくぐらせて定着させる。

無農薬で在来種の里山を凝縮 ポータブル・モバイル緑化システム

田瀬理夫　プランタゴ

右/里山ユニット「5×緑」。キャスター付きのタイプ。中/施工事例。設置したばかりの「逗子の家」の庭。左/約1年後の様子。里山ユニットは20センチキューブで¥19,800～。問合せ先/アネックス　5×緑事業部　tel 03-3280-2041　http://www.5baimidori.com/

変化しがちな町に対応するモバイルグリーン

モバイルグリーンは、大規模な植栽でも、短期間で設置できるのが強み。①富山市内広場に設置された「5×緑」。一つのユニットのサイズは、2.5×2.5×1m。重量は3.2t。3mのシナノキの高木、コナラ、エノキ、ムラサキシキブ、ウワミズザクラ、カシワ、ミズナラなど、39種類の植物が植えられている。8つのパーツに分割して植物を育成。それを現場で組み立てた。②移動には、圧搾空気によって対象物を浮上させるエアキャスターを使用。③広場でイベントが開催されるときなど移動できるのがモバイルグリーンの強みだ（日本設計との協働）。

里山在来種を育む仲間

「5×緑」の生産を担うのは、全国4カ所の生産者ネットワーク。各地の取り組みが、里山の環境保全につながる。①「野の花マット」などの生産を行う仲田種苗園（福島）。里山から人の手で集めた種を増やして育てた植物を混植する。②里山ユニットの生産拠点であり実験ラボの矢澤ナーセリー（茨城）。関東域の樹木の生産や接木技術の継承にも取り組む。③里山ユニットに使う林床植物を採取する馬頭の森（栃木）。森の手入れを行いながら植生の復元を図る。④棚田を守る地元の人が放棄田の畔の管理を行い、里山の植物を供給する畑（はた）集落（滋賀）。

金属のカゴから緑があふれ出ている。上面には野草と低木が茂り、4つの側面をツル性の植物が覆い尽す。里山ユニット「5×緑（ゴバイミドリ）」は、金網を組んだ立方体に保水性の高い軽量土壌（アクアソイル）を詰め、底以外の5面に緑を植えられるようにした緑化システムだ。移動はカゴごと。屋上やベランダに置いたり、積み重ねて立体緑化したりできる。コンクリートで固められた都会の真ん中に、一夜にしてハチやチョウが遊ぶ叢が出現する。

サイズや形状は自由にオーダーできる。定番は、20センチから50センチのキューブ（横長タイプもある）。小さなものは、狭小地のエントランスやベランダ、室内にも置ける。20センチキューブは6キロと、持ち上げて移動できる。大きなものにはキャスター設置も可能。可動性のあるモバイル緑化システムなのだ。

植えられているのは、秋の七草のような野草や、雑木林を構成する落葉樹、田んぼの畦道に育つ植物など、日本に自生する在来種。里山の風景さながらに、10～25種類を組み合わせている。ありふれた植物たちだが、それが今では減り続けている。2007年の環境省のレッドデータによると、日本に自生する維管束植物（種子植物とシダ植物）の24パーセントが絶滅危惧種なのだという。一方で公共施設でも個人住宅でも、緑化に使われるのは無国籍な植物たち。

開発者である造園家の田瀬理夫さんは「日本はお金をかけて〝地域らしさ〟を削ってきた。東京の人は自然から切り離された環境で暮らし、田舎はほったらかしで荒れている」と嘆く。雑木林や棚田など、少し前までの日本の暮らしは、人と植物の絶妙な関係によって成り立ってきた。人の手が入ることで、育生され、保護された植生は、多様な生物を育む。「5×緑」には、このような関係を修復する可能性がある。里山の植物を都市に運び、環境を豊かにすることで、里山に再び人の手が入る。その結果、日本の植生（風景）の再生に寄与する期待が込められている。

植物を供給するのは、全国4カ所の協力ナーセリー（苗木場）と里山ネットワークだ。畦道の植物を種から育てたマットの作成や、林床に生える植物の採取、接木による苗の育成など、それぞれ得意分野がある。植物は最終的に茨城県つくば市のナーセリーに集められ、ユニットに組み合わされる。

その際に、生態系のかく乱防止には最大限の配慮がなされている。ユニットを構成するのは、自然植生の区分に応じた地域の植物。たとえば、関西で里山ユニットを購入する場合、関西のナーセリーから植物をつくばに送って製作することになる。田瀬さんいわく、「地域性は、超えてはいけない一線」なのだ。

「5×緑」は、地域の活性化を促す可能性もあるという。「限界集落が畦の植物の価値を知り、管理することで希望を見出せるようになるかもしれない」と語る。都会の一隅に置かれた小さな緑は、人と植物、都市と地方の未来を乗せた箱舟のようでもある。

緑化のポイント

- 変化し続ける都市緑化では可動性のある植栽に可能性がある。
- 生態系をかく乱しないよう、植物の種の移動は自然植生区分を超えないこと。

たせ・みちお　1949年東京生まれ。千葉大学で都市計画と造園史を専攻。73年富士植木入社。77年プランタゴを開設。78～86年SUM建築研究所の一連の集合住宅プロジェクトに参画。90年からプランタゴ代表。プランタゴ tel 03-5840-6960 plamtago@carrot.ocn.ne.jp